

---

「新約のきよめ」

第12章 生きた供え物

## 求められているいけにえ

レビ的な組織では、二つの種類の供え物がある。

贖罪のための供え物と感謝の供え物。

贖罪のための供え物は、十字架で成就し、二度とささげられる必要がないもの。

一方感謝の供え物は、今も絶え間なくささげられるもの。

自分の生きたままのからだによって、すべてを神にささげる。

「からだ」という語は、私たちが目に見える形でささげることができるのは、からだだけだから。

それはその人の全部をということを意味している。

救いのために私たちのたましいを神に持って行くだけでなく、私たちのからだを聖化と奉仕のためにささげる。

何をするにも、すべてを神の栄光のためにする、ということが実践的理解になる。キリストが私たちの全存在を所有し支配なさるよう決意する。

# それはわたしたちの内側で始まるもの

同じ行動であっても、いわゆる道徳的な行動と方向が違う。

実践的きよめは、行いで始まるものではなく、在り方で始まる。

それは作り出されるものではない。  
内側の中心から表面にあらわれてくるもの。  
そして内部から生命によって成長する。

# それはうちにあるキリストが妨げなく現わされること

生活と奉仕が、内住のキリストの妨げられない働きの直接の結果となる。

私たちのうちに生きておられるキリストが、ご自身を私たちの死ぬべきからだにあって、周囲の人々に現わされる。

私たちは非常に貧しく、弱く、不十分であるが、キリストが現れるときに、周囲のすべての人に有益で喜ばしい祝福をもたらすために用いられる。

その原理は、自己犠牲の律法。

自分自身を犠牲にするときに、私たちは世に対する祝福、救いとなる。

私たちをその義務に召し、従順の中に溶かすのは、あわれみ。